

一月から二月にかけて五本ばかり芝居を観(み)た。三好美智子プロデュース「白いカラス」(黒田絵美子作・演出)、劇団仲間「十二月」(小山祐士作、藤原新平演出)、東京コンセルヴァトワール尚美(じょうび)「西条部門主催「ミュージカル・宵待草」(柏倉敏之作・演出、川本哲音楽)、劇団うりんこ「ディア・ノーバディ」(バーリー・ドハティー作、平石耕一脚色、松本祐子演出)、演劇集団土くれ「坂の上の家」(松田正隆作、石塚幹雄演出)などである。なかでもとくに印象に残ったのは「宵待草」と「坂の上の家」であった。

まず東京コンセルヴァトワール尚美による「ミュージカル・宵待草」だが、竹久夢二の青年期を、いま現在尚美の生徒である彼らが

体当たりで演じていることに好感がもてる。しかも昭

舞台に、血の通った人間、がいた

玉野井直樹

和初期の話であるにもかかわらず、夢二という人物が

われわれの身近に存在する者のように思わせる。ラスト夢二が病に冒されながらも絵を描きたい、描かずに



土くれの「坂の上の家」

ほどすがすがしく、充実した思いになれたことも珍しい。さっと彼等の若いエネルギーとそれをあたた

はいられない気持ちをついに向かって叫ぶシーンでは柄にもなく鳥肌が立った。

かく包み込む様な熟練された演出が素晴らしい。もちろん芝居にかかわったスタッフの熱意を

感じたことはいままでもない。次に演劇集団土くれによる「坂の上の家」だが、長崎の洪水により両親を失ってから身を寄せ合う様に生きてきた三兄妹が、長男の結婚話を境にそれぞれが自分の道を歩きはじめるとい

う話だった。この舞台も荒削りではあるが真つすくなくひたむきさを感じさせてくれるあたたい作品に仕上がっていた。なにより俳優から自由さを感じられたことが良い。アマチュア劇団ではあるが、そのことに甘んじることない姿勢を感じ、今後どの様な作品をつくってゆくのだろうかという期待感を抱かせる。

以上二つの作品の感想をのべたが、共通して感じたことは双方ともに舞台上に「血が通った人間」がいたということである。最近

の新作を見ていると、舞台の上からは、「人間」がみえてこないことがある。いったいどうしてそんなことになるのだろうかと思いをめぐらせてみると、やはり演出の問題ではないかというところに行きつく。演出はもっと一人一人の俳優の力を信じて良いものではないか? いや俳優の力というよりもこれまで生きてきた一人の人間の力かも知れない。

今回の二作品にはそれが感じられたのだ。いってみれば演出の「愛」のようなものを感じたのだ。これを感じるかどうかが作品の良しあしの大きな分かれ道になるような気がしてならない。自分も演出のはしくれとして、このことを他人事としてではなく己の芝居づくりの基盤となるよう心がけたいものである。

(演劇集団「五色の花」
主宰・演出)